

男の介護 そして、ケアメンになる。

—初めの一歩—



- 津止正敏、緒方有為子 監修
- 北九州市立男女共同参画センター 編・制作
- 北九州市立男女共同参画センター 発行
- 2014年初版
- 無料配布

介護している人は590万人で、そのうち男性は3分の1を占め、約190万人。特に、「働きながら介護している人は290万人で、そのうち男性が130万人。男性就業者数3,600万人の実に4%を占めており、今後ますます増えている」と見通した。

実は、筆者も5年前から実父の介護をしながら働いている。本書は、筆者のようなケアメンにとって、知りたい情報が存分に盛り込まれた良書だ。データも多く、介護が始まったとき、要介護者への接し方、家の介護環境などのテーマ別に、記入式の☑ボイントがまとまっているので、読みやすい。すぐに役立つノハヅが多數紹介されており、便利だ。ケアメンが相談したい内容別に、窓口の連絡先が載っているのは、渾いところに手が届く配慮を感じる。

「地域社会で孤立化しやすい!」というケアメン特有の課題に対して、全国でもいち早く「ケアメン養成講座」を提供し、ケアメンのネットワーク化を図っている点は、先進自治体である北九州市の面目躍如たる取組みだ。同じ境遇の方々と語り合う座談会の様子を読

むと、ケアメン予備軍や周囲の家族も安心感をおぼえるのではないか。

ケアメン当事者はもちろん、パートナーや子どもたちを含む、あらゆる関係者にとって必読の書である。

渥美 由喜 (東レ経営研究所ダイバーシティ＆ワークライフバランス研究部長)

介護離職

毎年、10万人が介護をきっかけに、仕事を辞めている。そのうち、男性は約3分の1を占めているものの、増加率でみると女性の倍の勢いで増えている。子育てを妻に任せきりにしていた夫たちは、時間や場所に制約があるなかで働くことに慣れていないことが仇となって、介護と仕事のどちらを取りかうという二者択一と考えてしまうケースが多い。男性が、子育てや家事をしながら働くようになると、単に妻の負担が軽減されるというだけではなく、将来的な介護リスクに備えることにもなる。男性の育児・家事参画は、リスクマネジメントを考えるべきだ。

難民高校生

—絶望社会を生き抜く「私たち」のリアル—



- 仁藤夢乃 著
- 英治出版
- 2013年初版
- 1,500円(税別)

本書には、大人たちが見たたくない10代の少女たちと彼女たちを利用しようとする大人たちの実情が書かれています。著者は、高校時代、家にも学校にも居場所がなく、渋谷で月25日を過ごす、まさに「難民高校生」だったのです。しかし、ふとした人生の出会いから学び直し、本書を執筆した時は23歳でした。現在は、「彼女たちには頼れる大人が必要」と、街でたむろする若者たちに声をかけ、寄り添い、居場所を届ける活動家です。

渋谷など繁華街にいる高校生は、一見元気そうで、助けを必要としていない若者のように思えます。が、実は複雑な事情を抱えながら必死に生きている若者たちで、繁華街は彼らにとって「うわべ」の居場所にすぎないのです。

このような若者に対する人ができることは、若者と「個人として向き合う」ことであると本書は説いています。しかし、若者のリアルを知らない人が若者と個人として向き合うことが難しいことも指摘され、若者と大人の間の溝が深まっていることが危惧されています。

著者・仁藤夢乃さんの造語で、家庭や学校に居場所がなく、他に頼れる人をもたない高校生のことといいます。高校生の日常は、家庭と学校が中心の、そう広くない世界にあります。頼れる人をもたず、「家にも学校にもいたくない」という状況になるとどんどん精神状態が不安定になっていき、結果、希望の可能性を失い、その生活から抜け出せなくなってしまうと、本書は指摘しています。

仁藤さんの講演会(ムーブ催)、11月22日[土]では、大人に押取られる難民高校生のリアルが、当事者の視点から語られます。本書を読み、仁藤さんの生の声に耳を傾けることで、若者のリアルの理解が深まり、若者と「個人として向き合う」ヒントがきっと得られるはずです。

難民高校生

筆者・仁藤夢乃さんの造語で、家庭や学校に居場所がなく、他に頼れる人をもたない高校生のことといいます。高校生の日常は、家庭と学校が中心の、そう広くない世界にあります。頼れる人をもたず、「家にも学校にもいたくない」という状況になるとどんどん精神状態が不安定になっていき、結果、希望の可能性を失い、その生活から抜け出せなくなってしまうと、本書は指摘しています。

仁藤さんの講演会(ムーブ催)、11月22日[土]では、大人に押取られる難民高校生のリアルが、当事者の視点から語られます。本書を読み、仁藤さんの生の声に耳を傾けることで、若者のリアルの理解が深まり、若者と「個人として向き合う」ヒントがきっと得られるはずです。

AIDで生まれるということ

—精子提供で生まれた子どもたちの声—



- 非配偶者間人工授精で生まれた人の自助グループ(DOG: DI Offspring Group)
- 長沖曉子 編著
- 萬葉房
- 2014年初版
- 1,800円(税別)

近年の生命倫理の大きな特徴は、生殖医療で生まれた子どもたちが成人し、みずから技術をめぐる議論のテーブルに着き、自分たちの立場を主張し始めるようになったことである。

本書は、AID(artificial insemination by donors)またはDI(donor insemination)で生まれた人たちが、「自分たちの体験を、自分たちの言葉で綴った」ものである。病氣でも障がいでもなく、戸籍も普通にあるけれども、父親と血がつながっていないことを隠され続けてきた、親に裏切られたという怒りや、自分の半分(精子の提供者)が分からぬ不安感を抱えている。こうした彼ら共通の生きづらさは、外からは見えにくい。親からも「不妊に悩み、どれだけつらい思いをしたか?」「理解できたら、許してくれるわよね」といわれ、威圧感を感じたり、「生まれてよかつたね」と、自分が悩んでいること自体が間違っていると否定されてしまうこともある。

生殖医療が注目を集めつつある現在、その焦点は「不妊に悩む人たちに当たられており、技術によって

生まれてきた人たちの心情を配慮するには至っていない。「不妊」の悩みは、出産の時点で「解決」と考えられがちである。けれども、子どもたちにとっては、「生まれたその時点が問題のスタート」なのだと痛感させられる一書である。

小林 亜津子 (北里大学一般教育部准教授)

AIDまたはDI

「非配偶者間人工授精」ともいわれ、妻の卵子と夫以外の男性(ドナー)の精子を用いて人工授精を行ない、子どもをもうけること。無精子症などの男性不妊に悩む夫婦に子どもを持つことを可能にする「治療」として、60年以上前から行なわれてきた。日本でも1949年に初めてDIによる子どもが誕生し、その後、現在まで一万人以上の子どもが生まれているといわれている。日本産婦人科学会は、1997年にAIDに関する「会告」(事実上のガイドライン)を発表し、1998年から実施成績を公表している。毎年、100人から200人の子どもが生まれている。

歴史を読み替える

—ジェンダーから見た世界史—



- 三成美保、姫岡とし子、小沢正子 編
- 大月書店
- 2014年初版
- 2,800円(税別)

本書は高等学校の世界史教科書のほぼ全体をバーし、類書を見ないジェンダー史の梗概である。それは2004年のジェンダー史学会の創設やジェンダー研究センターの相次ぐ設立などによる、国内外の研究成果の蓄積と共有がもたらした研究進展の証しいえよう。

近代の章では、自然性差とみなされてきた「母性」や「男性の戦闘性」などが、実は近代の産物であることが鮮やかに抽出されている。たとえば「戦う男性像」が定着するのは、武装による祖国防衛が男性全体の問題となる19世紀後半で、18世紀には「戦わない男性」の否定的な見方は存在しなかったという。「男性の戦闘性」という言説は、国民概念やナショナリズムの誕生と切り離せないものとして立ち現れるのである。

現教科書と読み比べると、本書の方が数段面白かった。本書がそのままなじみを支配者や権力者より、日々を営む人間に向けているからである。紀元前2000年頃のシュメール王妃の子守歌や、紀元前700年

のギリシャ詩人ヘシオドスの、女たちは貧乏な男には連れ添わず裕福な男に連れ添いたがる、という嘆息など、時空を越えて当時の人々の思違いが躍るようだ。そして21世紀のリベリアのリーマが、乳房を反乱兵に切り取られた行動に深い共感を覚えた。

とみ永 桂子 (福岡大学非常勤講師)

ジェンダー史

「ジェンダー史」という用語は、女性を主体とする女性史研究の進展過程で使用されはじめたが、1988年出版のジョーン・スコット著「ジェンダーと歴史学」の影響が大きいといえる。また「女性史」が、「女性による、女性のための、女性についての歴史」として矮小化され、歴史学から孤立するのを避けるため使用された面もある。

本書編者の姪岡氏によれば、ジェンダー史とは、権力作用によるジェンダーの差異化の過程と、こうして構築されたジェンダー・カテゴリーなどのようなメカニズムで作用して、いかなる歴史的帰結が導かれるのかを読み解くこと、としている。